

【書評】

長津一史著『国境を生きる —— マレーシア・サバ州、海サマの動態的民族誌』  
(木犀社、2019 年)

山本博之

本書は、国境問題の「先駆的地域」であるマレーシアのサバ州において、マレーシアとフィリピンの国境海域であるスル海域に住む海サマ（バジャウ人）に焦点を当て、海サマと近代国家の関わりおよび海サマにとっての国境の意味を論じるものである（2 頁）。著者の問題関心は、本書の調査を行う前にフィリピンのシタンカイ島で行った調査に遡る。シタンカイの海サマは、陸サマたちに経済面で従属的な立場に置かれていただけでなく、ムスリムとして認知されないという蔑視と差別を受けていた。これに対してサバ州のセンボルナ郡では、海サマは政治経済的な地位を得ていただけでなく、ムスリムとしての認知を得ていた（3 頁）。その一方で、センボルナの海サマの間では、1970 年以前からサバに住んでマレーシア国籍を持っている「先住者」と、1970 年以降にサバに来た「移民／難民」との間の亀裂が深刻化していた（5 頁）。著者は、海サマを「国家なき自由な海の民」とロマン化する見方を批判し（33-34 頁）、「国家と対峙しながら国境を生きる人びと」として海サマを描こうとする（8-9 頁）。

本書は、研究の視点と立場を記した序章、フィールドワークについて記した一章、それらに続く 3 つの部、および結びの章から成る。Ⅰ部の「民族の生成と再編」では、主に言語の観点から海サマを紹介した上で、民族誌研究を中心に海サマについての先行研究を整理し（二章）、スル海域の歴史を概観し（三章）、植民地期から調査時に至るバジャウ人という民族表象の変容を示す（四章）。Ⅱ部の「開発過程と社会の再編」では、センボルナ郡の歴史を紹介し（五章）、調査地のカッロン村の概況を紹介した上で（六章）、独立後の国家による開発を通じた海サマの地元社会の変容を論じる（七章）。Ⅲ部の「イスラーム化と宗教実践の変容」では、サバでイスラーム化が進められた様子を概観し（八章）、教育を通じて海サマがムスリムとして認められるようになった過程を明らかにする（九章）。海サマが公的イスラーム教を受け入れていく過程で伝統的な儀礼や慣行が消失したことを示し（一〇章）、初米儀礼が衰退しているのに対して死者霊儀礼が継続されていることについて考察する（一一章）。

本書の特筆すべき点の一つ目は、一章で記されている調査方法である。地図も航空写真もない状況で、約 1 ヶ月半をかけて独力で村の地図を作成し、この作業を通じて村のほとんどの人に顔を覚えてもらい、どの地区でも話を聞くことができるようになった（61-62

頁)。役人を介した調査では会えなかったような国家の周縁や外縁にいる人たちからも話を聞くことができた。これは著者の人柄と根気によって可能になったものであり、敬意を表したい。

また、Ⅲ部で提供されている海サマの儀礼の詳細な記録は、調査地における十分な人間関係を構築した著者だからこそ得られた情報であり、多くの研究に有益なものとなるだろう。そのほか、サバ研究の立場からは、サカラン・ダンダイ（元サバ州首相・州元首）の地元有力者としての系譜や、1994年の州議会選挙の無所属候補についての情報をはじめ、脚注で記されている各種の社会データを含め、本書には個別に参考になる情報がたくさん盛り込まれている。

このことを確認した上で、これらの詳細かつ膨大な情報がどのように整理され提示されているかという観点からコメントしたい。連邦国家マレーシアでは本書のテーマである地方開発とイスラム教は州の管轄であるため、どちらも州の枠組で論じられるものと思われるが、本書では海サマの開発とイスラム化がマレーシア国家の枠組で（半島部マレーシアと直結させて）論じられていることについてである。

本書は、開発やイスラム化の事例の解釈にあたり、もっぱら半島部マレーシアの研究を参照している。この結果として、本書は調査地である村のリアリティを捉え、それを半島部マレーシアの国家エリートのリアリティに沿う形で記したものにもなっているように思われる。それは、評者なりにまとめるならば、何十年も前の建国時の合意を盾に州の権利を主張して中央政府の開発政策に素直に従わず、「正しい」イスラム教を実践していないとサバの人びとを捉えて、開発とイスラム化で揶揄い上げてブミプトラの一員としてマレーシア国家の主流に統合しようとする見方と重なるリアリティである。それに対し、サバ州のローカルエリートのリアリティは、中央政府による介入を最低限に抑え、サバが持つ多様性を維持したままマレーシア国家の主流への統合を求める立場と重なるリアリティである。後者の立場に立つ評者にとって、本書は国家エリートの発想を理解する上で参考になるところが多かった。（なお、後者の立場に近いサバの開発とイスラム化に関する研究にRegina Limの研究などがある。）

二つの立場の違いがよく表れているのは以下の二点である。

著者は、サバで「国家」と言ったときに連邦と州のどちらを指すかの区別が重要であることは承知した上で、調査対象者が自分たちの生活世界に外在する権力体系をあいまいかつ抽象的に認識していることを理由に、連邦と州の区別を厳密に行わないとの立場をとる（50頁）。このことを反映してか、本書ではデータを解釈し意味づける際にしばしばサバではなく半島部マレーシアの状況を参照する。マレーシア加盟後のサバの政治史はごく簡単に触れられているに過ぎない（106-107頁）。連邦と州を区別しない議論を行っていることは、著者が1997～1999年にセンボルナ郡で調査を行ったという時期と地域が影響しているのではないかと思われる。

サバは、1963年のマレーシア結成の際に内政自治が認められた。また、歴代首相を出してきた統一マレー人国民組織(UMNO)をはじめとする半島部の与党はサバに支部を作らず、サバでは地元政党が州政府を組織して、州与党が連邦与党と連立を組んできた。しかし、1985年にサバ州政権に就いたサバ団結党(PBS)が州の権利を掲げて連邦与党と対立し、1990年に連邦与党連合から脱退すると、サバは連邦野党が州政府を担う野党州になった。

マレーシアの地方行政は州政府の管轄下であり、村長を長とする村落安全開発委員会(JKKK)が村落レベルの開発プロジェクトを実施する。州政権の奪回を目指す連邦与党は、1991年、サバにUMNOの支部を開くとともに、連邦政府の開発予算を州政府を迂回して執行するため、サバ連邦開発局を新設し、各選挙区の連邦与党議員(野党議員の場合はその選挙区の連邦与党の支部長)を通じて開発予算を執行した。そのサバ全体の取りまとめ役であるUMNOのサバ州連絡委員長に任じられたのがサカランだった。

サカランは、センボルナ郡の地元有力者で議員の経歴は長かったが、州や連邦のレベルではほとんど実績がなかった。1994年に連邦与党が州政権を奪還すると州首相の座につくが、政治手腕が極めて低いため、名誉職にあたる州元首に祭り上げられて約半年で州政治の実権を奪われた人物である。

本書の調査地であるカッロン村はセンボルナ郡に位置し、サカランのお膝元にあたる。本書のもととなった調査の約3年前には、連邦政府によるサバ州政権奪還のための開発予算の受け皿となったサカランを通じて、センボルナ郡には連邦政府の開発予算が大量に流れ込んでいた。地方開発は村長のもとでJKKKが進める仕組みになっているが、政権交代の直後は前政権中に任命された村長を解任できないため、JKKKのうち与党議員に近いメンバーを実質的な取りまとめ役にすることで村長を迂回して開発プロジェクトが進められた。

調査地に最初に入って村長に会おうとしたら村長ではなくJKKK委員長に紹介されたエピソード(57頁)から、著者はインドネシアやフィリピンの調査地と比べて、この地域では誰が村長で誰がJKKK委員長か村人にとって大した問題ではないと驚いているが(58, 61頁)、これは1990年代後半のセンボルナ郡だからこそ見られた特殊な状況であり、この事例を一般化してサバについて語ることはできないだろう。

二点目は先住民／原住民／ブミプトラに関することである。「バジャウ人の北ボルネオでの原住民の地位は自明視された」(123頁)と書かれているが、実際には入植初期のイギリス人にはバジャウ人を北ボルネオ(サバ)の土着民ではないと見る人もいた。その考えを受けて、植民地期の北ボルネオにはバジャウ人などの沿岸部のムスリムをNativeから除外する見方もあった。マレーシア結成により、Nativeと別に、マレーシアの原住民であるブミプトラという考え方がもたらされた。このため、サバでブミプトラと言えば、単に先住民／原住民という意味ではなく、マレーシアという枠組で地位向上が期待される

人びと、さらに言えば、連邦政府との結びつきによって、半島部マレーシアのマレー人の手助けを受けて発展する人びとという意味を帯びる。北ボルネオ／サバの Native とマレーシアのブミプトラは、どの地理的範囲における先住民／原住民であるか、誰が含まれて誰が中心になるか、という2つの点で異なっている。本書は四章で北ボルネオ／サバの原住民（Native）の定義を論じているが、それとブミプトラとの違いは十分に意識されていないように思われる（125頁）。

開発による海サマ社会の変容を論じた七章で、著者は、海サマが開発プロジェクトを要求するときに自分たちを「先住者」「在地のブミプトラ」と位置づけたことを、「移民」に対する差別化であり、同じ海サマが分断されているとして批判的に捉えている。しかし、「在地のブミプトラ」は、マレーシアという文脈に置くならば「移民」に対置されるカテゴリーとなるが、サバの文脈に置くならば、半島部マレーシアのマレー人と結びついたカテゴリーでもあり、州内の非ムスリムに対して自分たちの権利を主張したと捉えることも可能である。サバのムスリムは1990年代前半までPBS政権のもとで開発政策の恩恵から外れていたという批判があったことを考えれば、この解釈が成り立つ可能性も十分にあるように思われる。

また、著者は先住性の意味を含まない penduduk（住民）に「先住者」の訳を当て、移民や難民に対置させている。移民や難民に対して住民である自分たちに開発政策を優先的に与えるべきだという主張は、国籍の有無を問題にしているのであって先住性を問題にしているわけではないという可能性についても検討の余地があるのではないだろうか。

サバの東海岸に位置するセンボルナは、地理的に見たとき、サバの州都コタキナバルから州内の最も遠い場所にあり、マレーシアの首都クアラルンプールからも国内の最も遠い場所にある。しかし、サバへの管理を強めようとした連邦政府の足掛かりに選ばれることで、サバの中で最も連邦政府に近い場所になった。本書の事例はそのようなセンボルナが置かれた状況をよく描いているが、それはセンボルナが「国境社会」であることとどのような関わりを持っているのだろうか。

海サマに寄り添う著者のメッセージは明快である。かつてフィリピンで陸サマに従属して差別されていた海サマが、サバで政治経済的な地位が得られるようになったことは喜ばしいが、開発プロジェクトを得るために先住性を主張して、同じ海サマの移民を排除しようとする言動が見られるのは嘆かわしいというものだ。著者の思いを十分理解した上で、あえて尋ねてみたい。海サマが海サマとして一つにまとまらなければならないと考えるのはなぜなのだろうか。

（やまもと・ひろゆき 京都大学）